

和和31年2月20日（月曜日） 毎月1回20日発行

やま博物館

編集責任者 大町山岳博物館



か も し か
Japanese Serow

こんど、山岳博物館の附属動物園に新しくはいつたかもしかの赤ちやんです。日本でかもしかゝを飼育しているのは、東京の上野動物園と、名古屋の東山動物園、そして大町の山岳博物館の3ヶ所だけです。貴重な動物ですから、大切に育てたいと思つています。

NO. 1 1956年2月20日

大町山岳博物館後援会 発行

はじめに

大町山岳博物館主事 内山 慎三

カラリと晴れた朝、陽光を浴びる北ア連峰をながめて、知らず知らず涙を流していた、という話をよく耳にします。「アルプスは俺達のおふくろさんだ」と言った人もいましたが、やっぱり私たちはあの姿に接するとき、無意識のうちに言いようのない感激にひたるのです。北アルプスの山麓に博物館ができて5年になろうとしています。私たちに一生つきまとうこの大自然を、私たちがも生きている間に、もつと科学的に探求しようという、何処からともなくてできたみんなの気持が、一緒になったことから発したものでした。

「博物館は若い」とよくいわれます。しかしこの若い博物館も、4年の間に大きな成長をとげていました。そして来年からは今まで養ってきた力で、本格的に北アルプスに挑むことになったのです。その成果がどの程度期待できるかは判りませんが、長い期間をかけて探求するなか、私たちができなかつたことを、次の世代の若い人たちが、更に深く究めてくれることを、いちばんの楽しみに始めたいと思っています。そして何十年かの後には、私達人間の力がきつとあの山の力に勝つことを信じたいと思います。

博物館が常に大衆と結びつきをもつて歩まなければいけないことは、言うまでもありません。しかし今まで、マス・メディアとして最も大切な博物館の出版物さえ、ロクにだすことができませんでした。幸いにこんど、博物館後援会の方たちから、その経費を負担していただけることになりました。北ア探求を前にこのような喜びはまたとありません。四月から行われる居谷里湿原の調査や、北アルプス一帯における動物物の生態映画の撮影の合い間に、貴重な資料をお知らせできることは、この上もない喜びです。私たちは多くの皆さんに、北ア探求の喜びを分かちあつて、同じようにあの山の下に住む私たち其通の誇りをたかめたいと思います。

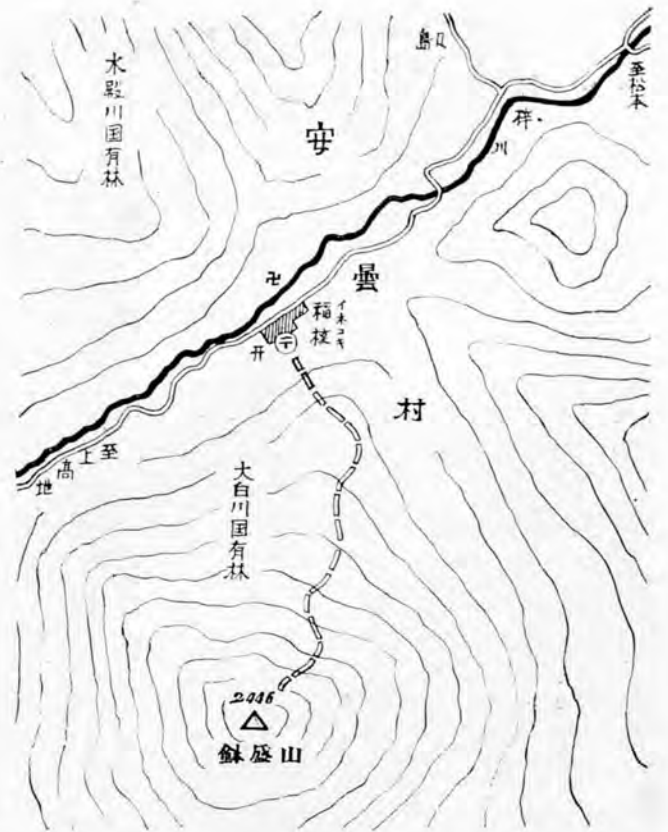
里に出てきたかもしか

2月2日午前9時頃、南安曇郡安曇村稲核郵便局裏、前田英一郎さんうら庭でツバキの葉を食べている動物を発見し、家人や村人たちが囲んでとりおさえました。大町山岳博物館では通知をうけて、直ちに係員が急行したところ、生後約9ヶ月のカモシカの幼体(メス)であることがわかり、当日本館附属動物園に保護しました。

当時の気象状態から予想して、北アルプス一帯は相当に荒れてお



前田さんの裏庭はすぐ山に続いていた。雪に囲まれたツバキの葉だけが真青だった。かもしかは右上方から下りてきた。(1956.2.2)



針盛山頂上附近ではよくかもしかを見かけることがあると言う点線は里に下りてくるとき通つてきたと思われる経路を示したもの

り、この日も朝からの吹雪で、餌に困つたカモシカは、うらの鉢盛山(2446m)から人里近くまで下りて来たらしいことがわかりました。博物館では既に新設されていたカモシカ舎に保護した後、東京上野動物園飼育課と飼料、飼育上の注意などについて連絡してもらいました。とりおさえた当時は空腹とひろろのため、すつかり衰弱していましたがその後8日間にわたり係員が日夜つきつきりで手当を加えた結果、しだいに元気を回復しました。今では係員にすつかりなついて餌を要求したり、後をついてくるまでになりました。



ツバキの葉はこんなに食い荒されていた

◇お願い カモシカには食物を投げ入れないようにして下さい。毎年サルやキツネなど大事な動物が変なものを食べて死んでいます。注意して可愛がって下さい。



土地の皆さんが名残を惜しんでかもしかを見送ってくれた。(午後四時)



北アルプス鹿島連峰、大スバリ岳富山側斜面の岩壁にいた親仔ずれのかもしかである。10mまで接近して写したもので我國でも稀な生態写真。雪崩の後に現われた餌を求めて来たものである。向つて右が親で左が仔。30.2.2 佐伯利満氏（富山県）の撮影による。

かもしかに就て

カモシカは有蹄（ゆうてい）類うし科に属する動物で、俗にクラシシ、ニク、イワシカ、アオシシ、シマシカなどと呼ばれています。おす、めす共に15cm くらいの短い角をもち、シカの角のように週期的にだつらくし、生えかわるということはありません。基部が樹木の年輪のように一年毎にしわをひとつづつまして行きます。身長は1cm くらいで尾は短く、体毛は淡色のものと、暗色のものがあります。冬になると銀色にかわり、やわらかい厚い綿毛が生え、一部分黒く一部分が白い。夏になると毛はまばらで黒灰色が強くなります。

カモシカは山岳地方で1,500m 以上の地に行かないと見られません。常緑の針葉樹林帯から草木帯の岩場や、断崖などの山奥で猟犬でも行けないようなところに住んでいます。冬は岩の下、夏はなぎの頭の風通しのよいところか岩穴などにいます。カモシカは岩石の切り立つた山岳地域にすむ固有の動物で、こんどのように人里へ下りてきたことは、大へん珍しいことです。カモシカはおとなしい動物で、人に危害を加えたり、めつたに声を出すようなことはありません。ヤギのような糞を必ずきまつた場所に出します。仔飼によつて

大きくなつたものは、よく飼主になつて、外出するような時など後について歩くようです。こんど来たカモシカも飼育の係員にはすつかり馴れて、後について歩きます。山で人間がカモシカに出合つたとき、こちらでおどりのまねをすると、逃げないで注視するという珍しい習性があるとも言われています。夏には水浴もします。

岩の下や穴、それに樹穴などに粗雑な巣をつくり、1年1産で3～6月1仔をうみますが、時には2仔をうむこともあります。11月から12月が交尾期で5月頃産みおとします。生れた仔は1年間親が連れ歩いています。胃の構造は喰いだめできるようになつていて、腹一つばい食べると外敵を発見しやすい高い高い岩の上で、反すう（かみかえし）をしています。草食性でいたつて素食であり、夏は野草、木の新芽、特にヤナギ、オオカメノキ、ツガ、マツ、ヤマブキ、ヤマウド、クサソテツなどを食べ、冬になるとシヤクナゲ、ツバキツガ、シラビなどの葉や、サルオガセ、雑木の梢なども好んで食べます。したがって営林署で植林した若木の新芽を食べる害を与えることもあります。飼育の場合にはサクラ、モミジ、マサキなどの葉や、にんじん、さつまいも、ばれいしよ、りんご、おから、こめかなどを適量と与えます。水は常に必要です。

分布は本州、四国、九州にすみ、日本特有の動物で大正9年に天然記念物に指定され、年々少なくなつていくのを保護されています

動物は何年生きる？

私たちの身のまわりにはたのさんの動物が住んでいます。この多くの動物たちは「一体何年くらい生きてくれるだろう？」という疑問をお持ちになつたことはありませんか。よく私たちは「ツルは千年、カメは万年」といいますが、カメは実際には250年生きていて最も長い寿命です。ツルは60年で人間なみということが出来ます。カメのつぎに長生きするのはゾウで150年、ワシは120年生きます。最も寿命の短い動物はネズミで3年です。博物館の動物園にいるなかで、リスは14~15、ウサギ7~8、サルが20、キジ15、カラス90、フクロウ70、クマ20~30、オオハクチョウ60、カモシカ20~30カモ類が18年で、フクロウがいちばんの長生きものです。

そのほかお馴染みの動物を拾つてみると、オオカミは12~15、ライオン20~25、シロクマ33、ラクダ50、カバ40、ガチョウ80、ペリカン15、ダチョウ50、キリン50、サイ40年となつています。また私

駅前のオオハクチョウ



たちが野や山でよく出合うカエルは20年、トカゲは50年、ヘビは50年も生きています。家畜ではウマ40~50、ウシ20~25、ネコ10年、イヌが12年それぞれ生きています。このようにしてみると、一部の動物を除いて多くの動物は、人間よりも比較的短命だということがわかります。

後援会会員募集

博物館後援会の会員を募集しています。年額千円を納める団体ならびに、年額三百円以上を納める個人を正会員といたします。会員に以下のような特典があります。

- 1、博物館の諸指導行事を通知し参加の便をはかる。
- 2、毎月「やまと博物館」を配布する。
- 3、団体には講師、指導者派遣の求めに応じる。
- 4、博物館に支障のない限り、博物館の資料（標本、図書、写真、図板等）器具の借り出しをあつせんする。
- 5、その他博物館で種名同定、研究指導など諸種の便宜をうけるあつせんをする。
- 6、いつでも博物館を無料で観覧できる。

【博物館だより】2月3日（金）普及部会、研究会のスキー講習会打合

2月4日（土）研究会スキー講習会 大町スキー場 会員31名参加 講師海川氏

2月5日（日）山岳スキー練習場設定 福島・海川・木下氏等6名 東山へ。

2月11日（土）富士映画社今村氏一行来館 記録映画撮影につき懇談

2月12日（日）第1回居谷地区総合調査打合 羽田嘱託ほか14氏、記録映画撮影につき今村氏一行と具体的な協議

2月14日（火）研究会だより第3号発行

2月19日（日）普及部会 31年度愛鳥運動計画立案。

お知らせ 本号の購読を御希望の方には実費1部10円でおおかけします。申込は大町山岳博物館へ。

博物館後援会



サンカノゴイ Bittern

北海道には夏鳥又は留鳥として、広い葦原、湿地の草原などにやゝ多く見られますが、本州では秋冬の頃に草原などでまれにしかみることができません。本館に所蔵されている標本は北安曇郡神城村平川で昭和28年2月に採集されたもので本県では初めての記録で貴重な資料です。単独で生活し、夜になつて小魚、カエル、水棲昆虫などを食べに水中へ出て来ます。敵に会つるとそれに直面し、体をのびし、クビとクチバシを地面と垂直に立て、動かないで、敵が移動するにつれて体の方向を向けなおす面白い習性をもっています。これを擬態（ぎたい）といいます。オー、オー又はアーク、アークとうめくような声でできます。羽の色は頭上黒色、背面は黄褐色に不規則な黒い縦斑と横斑があります。主として葦原に巣をつくり、4月上旬から5月下旬頃に4~6個の卵を産みます。

小鳥の 巣箱 コンクール

31年度愛鳥運動の計画が19日の普及部会で決まりました。まず、巣箱製作法の指導が3月下旬まで行われます。研究会では25日発行の「研究会だより」第4号に作り方が載せられますが、一般へは博物館から「巣箱の作り方とかけ方」という小冊子が配布されます。また3月中旬には映画会で巣箱についての知識を得ることになっています。製作講習会は3月に入ってから行われますが、4月には巣箱コンクールも開かれます。今年は5月になつて巣箱をかけたあと、野鳥の声をきく会、野鳥を語る会、野鳥の研究発表会などたくさんの行事が行われます。その中で巣箱による観察と研究は大いに期待がもてるものとひとつでしょう。

（今月の会合）▲第2回居谷各里地区総合調査準備会、25日会議室 ▲記録映画撮影打合会、25日会議室 ▲博物館普及部会、28日事務室

かもしかくに名前をつけて下さい

こんど博物館にきたカモシカの赤ちゃんに皆さんから名前をつけてやつて下さい。決まりましたら次号で発表します。締切は3月15日博物館まで。

編集後記 創刊号がカモシカの特集号のようになりましたが、博物館としては特筆すべきことなので御諒承下さい。文字より写真に重点をおいて編集してみたいと思っています。御感想をどしどし御寄せ下さい。次号はライチョウ、ノウサギなどの動物と、春を待つ植物の生態をお知らせする予定です。

やまと博物館 No.1 1956.2.20発行
編集発行人 大町山岳博物館
発行所 大町山岳博物館後援会
長野県大町市神楽町電話211番
印刷所 信州印刷株式会社